



自宅庭にて 平成八年

にぎりしむひとすぢの糸も古りにけり

われは津軽の柵より出でず

『津軽の柵』より

スポット企画展

# 追悼・福井緑展

弘前市立郷土文学館

【開館時間】9:00～17:00（入館は16:30まで）

【観覧料】一般100円、小・中学生50円

（弘前市内の65歳以上、市内の小・中学生、市内の留学生、市内外の障がいのある方、ひろさき多子家族応援パスポート持参の方は無料）

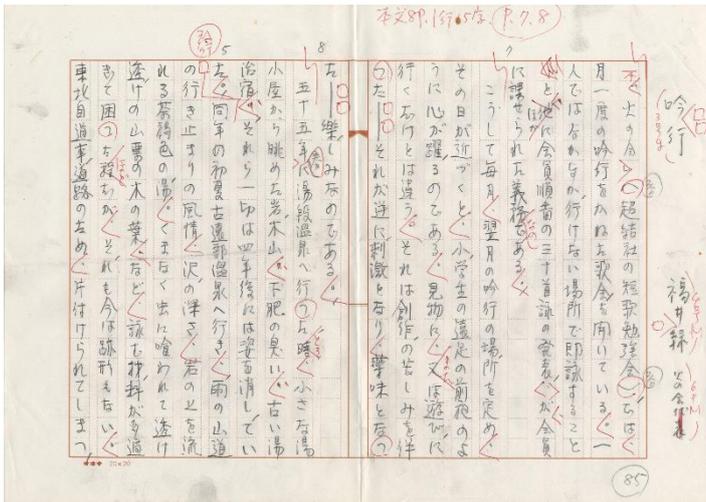
〒036-8356 青森県弘前市下白銀町2-1（追手門広場内）  
TEL 0172-37-5505 FAX 0172-36-8360  
E-mail kyoudo@city.hirosaki.lg.jp

令和7年9月27日（土）

～12月8日（月）

福井緑は、昭和6年(1931年)大鰐町に生まれました。昭和34年、生涯の師と仰ぐ宮<sup>みや</sup>終<sup>しゅうじ</sup>二の「コスモス」に入会し、41年には同人に。終二死後の63年には、島田修二の「青藍」に参加し活躍します。福井緑は津軽に根を張り、52年に結社を超えた津軽女流短歌の会「火の会」を結成し、平成3年に同人誌『真朱』を主宰。11年には青森県歌人懇話会<sup>へんすう</sup>の第三代会長に就任するなど、本県歌壇の振興と後進の育成に努めました。歌集は『邊陲<sup>えんすい</sup>詠』『無象の塔』など7冊、ほかに随筆集2冊を刊行しました。

本展は、令和5年9月に92歳で逝去した福井緑を追悼し、そのすぐれた歌業を紹介するものです。



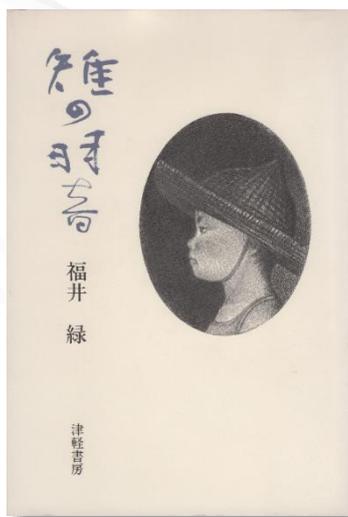
原稿「吟行」

超結社の津軽女流短歌の会「火の会」の〈吟行〉について書いた文章。福井緑は、吟行の楽しみを「創作の苦しみを伴った — それが逆に刺激となり、薬味となった — 楽しみなのである」と記し、それが「火の会」が9年も続いている要因の一つだとしている。本文は、タウン誌『月刊弘前』の昭和60年1月号に掲載された。



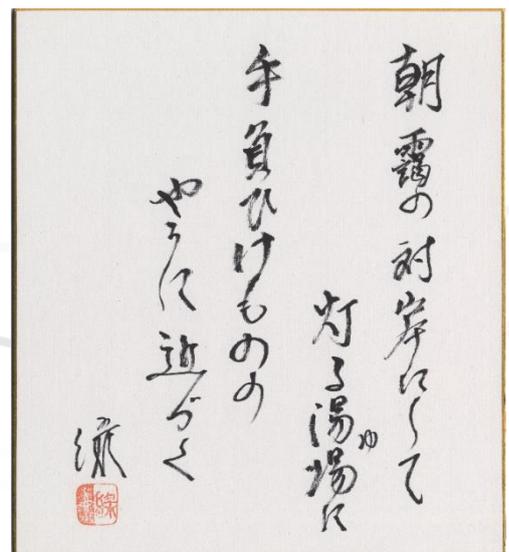
歌集『無象の塔』  
不識書院 平成4年7月11日

福井緑の第三歌集。歌集名は造語で、「失ったものへの生の証」を意味する。日本歌人クラブ東北ブロック優秀歌集賞を受賞するなど、全国的に評価された。



随筆集『雉の羽音』  
津軽書房 平成元年8月10日

「若き日の無鉄砲さ、母としての重い子育ての時期、母、父、夫と三つの葬儀、子供の自立と、一人に還った現在の日々」という「まぎれもない私の一生」が記された随筆集。



色紙

朝靄の対岸にして灯る湯場に  
手負ひけものやうに近づく 緑